

パネルディスカッション(概要)

「人間にとって『旅』とは何か」

(以下敬称略)

コーディネーター 石森 秀三 国立民族学博物館博物館民族学研究部長・教授
パネリスト 川邊 重彦 東京都武蔵野市教育委員会教育長
小野 具彦 全日本中学校長会長(東京都中野区立中央中学校長)
天野隆太郎 (株)JAL セールス 東日本支社顧客販売グループ長
柴田 憲信 海外旅行総合研究所(ガク・アソシエイツ)主任研究員

石森 皆さんこんにちは、ただいまご紹介にあずかりました国立民族学博物館の石森でございます。

研究主題が「旅の原点から新しい修学旅行を考える」ということですので、原点に帰るような形で修学旅行を考えてみたいと思います。

今、日本という国そのものが大きな岐路に立っていると私は思っております。失業率も戦後最悪をたどり、企業倒産、経済の伸び悩み、また政治的な改革の問題、そしてまた、行財政改革、教育もさまざまな事件等々で、確実に日本のある部分がおかしくなっています。そういう中で、教育の持つ意味が従来にも増して大変重要な局面を迎えています。

文科省もさまざまなことを打ち出しておりますが、物事は簡単ではなくて、日々の現場で本当にご苦労なさっていらっしゃると思います。これは教育現場だけの問題ではなくて、日本全体が今大きな岐路に立っています。一言で言いますと、ひょっとするとこのまま醜き衰退国家の道を歩むのか、それともより美しき成熟の国家・社会になり得るのか。これから10年、20年の間でその方向がより明確になってくると思います。

そういう中で、教育にさまざまな改革が必要であると同じように、修学旅行そのものも新しい形をとっていかねばなりません。三室中学の栗原先生からのご報告を私は感動をもってお聞きいたしました。生徒さんの感想文を読んでも、かなり大きなインパクトを生徒の心に与えているということを知って、一つの新しい形の修学旅行を感じました。修学旅行は今後新しい形をとらねばならない。しからばどうあるべきか。そういうことを考えるときに、人間悩んだら一度原点に立ち戻る。「人間とは何ぞや、どう生きるべきか」と考えたときに一度原点に立ち戻るのが一番よろしかろうということでもあります。

本日は4人のパネリストをお迎えしております。第1ラウンドは、それぞれのお立場で「旅」というものの持つ人生の中での意味合いといったことに触れながら、あわせて自己紹介もお願いできればと思います。

私に一番近い川邊先生からよろしくお願ひいたします。

川邊 奈良県生まれと書いてありますが、生まれも育ちも旅育ちというのでしょうか。「あなたの出身地はどこですか」と聞かれて、どこを言おうかなと困ります。私は親父の勤めの関係で奈良県の御所町、今の御所市で生まれました。それから、群馬県の伊勢崎市へまいりました。それから大阪へまいりまして、当時は仙北郡高石町といましたが、現在の高石市に小学校3年までおりました。食料難でもあって、本籍の茨城の水戸市へ移りまして、小学校の途中から中学校の終りまで。それから、山形県の、先ほど発表にありました米沢市へ行きまして、米沢興譲館高校から山形大学を出て、東京で就職したという、まさに転々としておりました。

食べるために移住するという原始的な旅の始まりのような、父の転勤に合わせた様々な地域で、三度笠と友だちに言われ、流れ者と言われ、いじめられはしませんでした。育ったということです。こうやって長ずるに及んでみますと、そういう地を訪ねるというのも懐かしいものです。自分の中に部分的に残っている風景が無残にもなくなっていることでもあります。旧番地で尋ねると、このあたりと大変懐かしい思いがするのです。

幼いころにどういう生活体験を持った都市か、どういう出会いのあった都市かというのは、大きく成長しても残っていくものです。そして、訪ねる場所があるということは人間にとって幸せなことだと思います。現在は、旅に出かけるということは仕事上で出かけるということになってしまいます。シンポジウムなどが終わりますと、さっと帰ってくるという生活ですので、束の間の旅をやるということになります。

武蔵野市を中心にして第8回東京国際スリーデーマーチというのをやっております。玉川上水など武蔵野の地域に残っている自然を求めて、10キロ、20キロ、30キロと、3日間続けているんなコースを歩いているのです。延べ35,023名が今年の参加者であります。北海道から沖縄から旅をして、列車に乗って来られたのでしょうか、飛行機で来られたのでしょうか、あとは自分の足でということです。

9月の初めに「奥の細道」鳥海ツアーマーチというのがあり、行ってまいりました。夜、理事会をやり、翌日、第1日目の出発式でご挨拶をして、10キロコースに挑戦して少し早めに歩いて、山形県湯沢町の高橋教育長さんと示し合わせ、「奥の細道」を訪ねたいと、連れて行っていただきました。

ご案内のように「新古今和歌集」にも歌われているようなところでありまして、吹浦のちょっと先に象潟というところがありますね、秋田県の象潟町。片や遊佐町、そして吹浦という、秋田街道の旧宿場町が海岸沿いにあるのですが、そこを訪ねました。そのときも「象潟や 雨に西施が 合歡の花」という俳句を思い出しながら、5年前に石畳がずれたり崩れたりしているのを中学生が直したというところを歩きました。芭蕉は松島から歩いて象潟へ来たのですが、風光明媚な明るい松島に比べて、ややしんみりとした思いの象潟が当時の名所旧跡であったのです。芭蕉の旅というのは名所旧跡を歩くという旅で、俳諧の世界を追求していったのであります。

そんなひとときを持ち、そして、高橋さんという人にいい出会いをさせていただいた。本当に短い時間ですけれども、名所旧跡を足で歩き、帰ってくると「奥の細道」などをひもといてみて、前後の事情をもう一回調べ直してみる。そのように、つまりリフレッシュをして、いい人に出会って、その接したのから発展的に学びたいという質的な欲求がある。旅というのはいつも最高で新しいすばらしい出会いを求める道だというふうに思っております。

石森 続きまして、天野さん、よろしく願いいたします。

天野 天野と申します。

最初に私自身の経歴でございますが、会社に入りまして30年になります。伊丹空港から勤務地が始まりまして、シンガポール、羽田空港、それから東京、ニューヨーク、名古屋、クアラルンプール、そして東京というふうに転々としておりまして、私の人生そのものが旅になっています。その間に子どもたちも成長して、「お父さん、私たちには実家がない」と数年前に言われ、やっと今、浦安に家を持ったところでございます。

そういう旅が人生そのものという話ですが、私にとりまして最初の旅と言えるものはどういうものだったのだろうかと考えました。特に学校ということ意識しますと、小学校に入り、遠足というのがあるのですが、初めて親元を離れて2泊したのを覚えています。これは当時の臨海学校です。その当時の国鉄に乗れば3つぐらい行ったところに三谷という海岸がありました。当時の臨海学校というのは地元の小学校の教室に泊まるのです。地元の皆様のご協力を得てプログラムが組まれていました。当時を振り返りますと、大変な感動とともに人間形成に役立ったのではないかと感じております。宿泊訓練のすばらしさは、まず枕が変わるということですね。この枕が変わるといのが、人間形成の第一歩ですね。人生で生きていく上で普段とちょっと違うということが一番重要なわけで、ここに自分を合わせていくのです。

何に合わせるのかというと、その土地に合わせていく、それから、その土地にいる人に合わ

せていく。これがだんだんグローバル化していきますと、その国に合わせていくということになるのですね。このことは、今、日本で一番重要なところではないかと思ひます。ですから、こういう機会を通して、子どもたちが将来、世界で育っていくということになりますと、先ほどの三室中学校の先生のお話には私は大変感動したのですが、原点に立ち返っているような気がしました。非常にうれしく思ひました。そういう意味で、私にとっての旅というのは人間形成の場というふうには考へております。

それから、旅のダイナミズム(躍動感)ということ考へます。私の好きな言葉の「P・T・A」、これは父兄会ではございませぬ。「Plane Train Automobile」、要するに飛行機と列車と乗り物、バスとか自動車という意味です。この3つを組み合わせた旅が、一番旅心を増して、旅情をそそると考へております。たまたまクアラ Lumpur 駐在のときに、日本人学校の6年生約150人の2泊3日の修学旅行のお手伝いをさせていただきましたが、この旅がまさに「P・T・A」でございました。このような企画こそ旅の醍醐味かなとその当時思ひておりました。

人にはそれぞれ旅に対する思ひ出とか気持ちがあると思ひますが、私の旅に対する気持ちを披露させていただきます。

石森 続きます、小野先生。

小野 私にとって旅とは極めて単純明快なものです。それは本物を見るということに徹してあります。本物を見るという願ひが私の一生を貫いていまして、幼い頃読んだ「トム・ソーヤ」、「ハックルベリー」に憧れて教員になり、海外旅行の味を覚えはじめ、アメリカに渡りました。当時まだミシシッピの河口であるニューオリンズに行くと日本人は少なかったのですが、そこで、自分で確かめて感動を覚えたことがあります。

夜、町に出かけるとフレンチクォーターズというところがあり、そこここからジャズの音が流れてきました。ドアが開かれていて、中で演奏しているのが見えるのです。いきなり入ってはいけないというアドバイスを受けて、ここはというところに入って夜を楽しんだことを思ひ出します。そのように、極めて単純で、本物を見ることによって自分を広げるとか、一服の清涼剤とするとかということが私の生きがいとなっていく部分であります。

全日中の仕事に携わってからは暇がなく、時間がとれませぬ。ですが、いいこともあるのです。と言ひますのは、いろんな会を終えて束の間の時間に、私の旅心がむらむらと湧き出てきます。そのときには手帳が有効でして、何でも書き留めるといいまいしょうか、行く先々でスタンプを押すのです。駅とか博物館とか美術館に行ったら必ずスタンプを押すのです。ときど

き押しすぎてしまい、自分の書いた字がわからなくなっちゃうのです。

福井に行ったとき、会が終わって、夜のレセプションまでに時間がありましたので、もらったパンフレットを見てどこかいいところはないかと探したら、「利家とお市の墓」があるお寺が歩いて10分ぐらいのところがありました。墓を前にしまして、さっき自分を広げると言いましたが、挑戦するのです。今私は、俳句と短歌に挑戦しています。利家とお市の墓を前にしたときの気持ちを恥も外聞も捨てて披露しますと、「勝家とお市の墓は慎ましく ひそやかなれど 花絶えることなし」。小さなお墓でしたけれども、生き生きとした花が捧げてありました。土地の人たちの思いが伝わってまいりました。

俳句と短歌に挑戦していると言いましたが、それも旅と関係があるのです。愛媛県の松山市で中国・四国の大会があったときに会った人が翌日の講演をなさる方で、俳句の大家なのです。隣に座ったとたん、「あなた、俳句をやりますか」と聞かれて、「いいえ」と言いましたら、「これを読みなさい」と言われましたが、仕事に追われ一晩かかっても読めませんでした。でも、俳句に挑戦してみました。朝起きましたら、一筋の朝日がさしていました。これを俳句にしてみました。「梅雨の間に 一筋の朝日 光る城」。そんなことで私の旅は本物を見ることです。

本物をもう1つ挙げましょう。ついこの間、北海道に行きました。帯広から近くの幕別町というところ。本当はすぐに帰ってきたのですが、見たいものがありました。レンタカーを借りて然別湖まで飛ばして行き、翌日朝早く忠類村というところに行きました。そこはナウマンゾウの化石の発見地です。発見された道路の崖のところまで行ってみたら、若干の保護はしてありましたが、見るかげもありませんでした。でも、ナウマンゾウの博物館がありましたので、つぶさに見学をしてきました。

私は何かあると本物を見る。後で海外の話もしますけれども、それもみんな本物志向で、これが見たいと思ったら訪ねるというだけの話です。そんなことで本物を見て、土地の誇るものを見て、それを私自身の清涼剤として、自分を見つめる時間もつくれます。これが私の旅の原点でございます。

石森 それでは、柴田さん、よろしく願いいたします。

柴田 海外旅行総合研究所の柴田です。

4年前に近畿日本ツーリストを定年退職いたしまして、現在、海外旅行、特にアジアの国々との交流という仕事をしています。私は高校2年のときに近畿日本ツーリストの修学旅行で京都と奈良に旅しました。それが私のこの業界に入るきっかけであります。何かと言いますと、そのときに私どもを案内してくれたチーフ添乗員は、添乗員を集めて命令を下し、人を動かし、

非常にすばらしい動きをしておりました。私はそれを見てこれぞ自分のやってみたい仕事だということで、近畿日本ツーリストを受験したわけでありませう。

会社に入りました。ところが、私の希望する修学旅行部には残念ながら配属されませんで、海外旅行関係の仕事をして定年退職をしてしまいました。今日、振り返ってみますと、どこかで私は修学旅行を担当できるのではないかという甘い期待を抱いたのですが、そういうこともありませんでした。この会場に近畿日本ツーリスト修学旅行担当の第一線の方もたくさんおられるようでございますけれども、ぜひ私の代わりに若い人たちにすばらしい修学旅行をご案内をしていただきたい。私は今さら修学旅行で若い人と一緒になって仕事はできませんので、それはグブアップいたしますが、若い人々に私の夢というか、私の実現できなかったことをぜひご理解いただきたいと思ひます。

私は近畿日本ツーリストに入社したものですから、旅とは何かというような問いかけをされますと、非常に困るのです。なぜかと申しますと、旅そのものが私の人生なのです。いつも自分の横にいます。旅というものは私たちがいいところにいざなう大変すばらしいものを持っています。

これから修学旅行というのは間違いなく伸びるものであるし、私の仕事の中で海外修学旅行もより楽しんでいただける、また有意義な旅行ができるように少しでも努力していきたいと思っているわけでございます。

石森先生から提起されたことにつきましては、私は自分で旅行したこともありますし、妻と旅行したこともあるのですが、どうしても仕事と関連してしまひまして、物を食べてもこれをお客さんに出したらどうかとか、何か見てもこれをお客さんに見せたらどうかなどすぐ考えてしまひ、仕事を離れて旅を楽しまないといけないのだと言われるのですが、なかなかそれができないで今日に至っております。恐らく私は死ぬまでそういう中でのではないかと思ひのです。

ただ、私がいろいろなお客さんのご案内をさせていただいた中で、感動のお言葉に接したり、また、旅をきっかけに新しい仕事を始められる、あるいは、新しい考え方を出されるという方がたくさんおられました。そういう意味では旅の持つ有効性と申しますか、旅の持つ重要な意味というのは、既に知っておられて体験されているのではないかと思ひます。私は、このすばらしい旅をあとどのくらいできるのかわかりませんが、いろいろと工夫をしまひたいと思ひている次第です。

石森 4人のパネリストの皆様方に旅について伺ったわけですが、4人のパネリストの皆様方

は、人生そのものが旅だとおっしゃっておられます。人類の歴史を振り返るというのも非常に大仰な話ですが、今から1万年ぐらい前に人類に大きな変化が起こりました。それは言うまでもなく農耕革命ですね。農耕革命というのは、ライフスタイルでの定住革命ですね。自分がつくる農作物の近くに住むわけですから。ここで人類の生活が大きく変わりました。それ以後、旅というのが意味を持つようになりました。それ以前はまさに人類というのは動き回る、旅そのものが人類であったわけです。

柳田国男先生によると旅の語源というのは「タベ」。「タベ」というのは物乞いをするということ、「ください」ということですね。今は、実に楽に旅できますが、かつては食べ物も背負って旅したわけですね。食べ物がなくなると近くのところに行って「食べ物をください」と。それから、「旅」という言葉が起こったという説もあります。そしてまた、英語の「トラベル」の語源はラテン語で「トラパリウム」、ミツマタの人間の拷問用語（人間に苦痛を与えるもの）です。

今、我々は「旅」というと、非常にロマンを感じさせる楽しいものとなっていますが、近代社会とともになったのであって、1万年前から近代社会の成立以前、ごく普通の庶民にとって旅というのは憂いもの、つらいものであったわけです。そういうふうを考えますと、旅の原点の1つは、現代の日本人にとってはある種の非日常、未知なる世界の中で未知なる人や未知なるもの、未知なる自然に学ぶということによる感動を得るものです。それは、三室中学校の例でも明らかだと思います。

そういう中で、修学旅行というものが変わっていかねばならないという局面を迎えていますので、それぞれのパネリストの皆さん方なりに修学旅行で何を学ぶべきであるかという点についてセカンドステージで話を進めていきたいと思います。

今度は天野さんからお願いいたします。

天野 修学旅行で何を学ぶか。いろんな形、いろんな目標、目的、場所があると思います。非常に抽象的な言い方ですが、多様性を受け入れるということだと思いのです。多様性というのは、先ほどの話に戻りますが、旅をすると最初に枕が変わる、トイレが変わる、風呂が変わる。これを変えられない子もいるということを知っています。お風呂も1人でしか入らないとか。銭湯に行ったことがなく、旅行は彼らにとっては挑戦なのです。

多様性を受け入れるということについてです。この10年ぐらいで日本には多くの外国人が来られていて、実際に周りで働いておられますが、今の子どもたちが大人になるころはもっと加速するでしょう。この時に柔軟に対応できないと、21世紀は生きていけないのではないかと考え

ています。ただ、受け入れるだけでは駄目だと私は思っています。日本人としてのアイデンティティを持つことが大切です。と同時に、地域のアイデンティティを持つ、学校代表としてのアイデンティティを持つということが大事だと思うのです。ですから、自分の出身地域の誇り、あるいは、この学校に在るのだという誇り、あるいは、この学校で学んだという意識、そういうものが同時に学べるのではないかと。ひいては国を意識することだと思うのです。

日本の若い人たちは今、「君が代」を誰にも強制されなく、自然に歌っています。サッカーの国際試合では、相手国と日本の国歌が必ず流れます。あの熱狂的なサッカーファンの中で、子どもたちから高校生、それから大人まで、自然と「君が代」を口ずさんでいるのです。こういう状況というのは、今の世の中では大変に求められているものであって、意識すべきものだと考えています。

そういうことができるような、かつ、外国の人も、あるいは、ほかの地域の人も、あるいは、ほかの学校の子も受け入れられるような、そういう意味の多様性を受け入れる。その意識が修学旅行で学ぶべきものと考えております。できるだけ早い時期に、若い時期に外国を知っていただく。すなわち日本を知るといふふうに考えております。

石森 続きまして、小野先生、お願いいたします。

小野 五感を生かして見聞を広めるといいますか、体験を広げる。五感というのは5つの感覚ですよ、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、この5覚ですね。

このことは、学習指導要領の中にあまりあらわれてきません。宿泊的行事の中には、平素と異なる云々と書いてあって、見聞を広めると書いてあります。「見る、聞く」です。これは当然なことです。なぜかというか、感覚をトータルに考えて100としますと、「視覚」というのは感覚の中でほとんどを占めていて、85ないし72%。それから、「聴覚」は、22ないし11%です。あとはぐっと落ちます。「嗅覚」が3.5%、「味覚」はなんと1%です。「触覚」は1.5%。

「視覚」は訪ねていったところの自然、文化、残された歴史的なものを自分で見て獲得してくる。それから、「聴覚」はどうですか。出会った人との会話の中で相手の言っていることをつかみとる。時には出かけた先で法話を聞いたりしますよね。あるいは、地域の人を招いて、その産業にかかわるお話を聞いたりします。例えば牧場が近くだったら、牧場主を招いてお話を聞いたりすることも可能です。こんなことを私も体験してきました。

さて、「嗅覚」。空気というのは違いますよ、東京と離れてよそに行くと、この3.5%を生かして感じ取ることができます。当然、三室中のように農家へ行けば農地が広がる場所の空気はまた違います。

それから、「味覚」。このごろ味覚が非常に重要視されていて、テレビ番組でも旅のほとんどを味覚が占めていますね。おいしいものを旅先で味わう番組が多い。わが校では修学旅行で力を入れているのは、泊まるところの味覚です。

さて、「触覚」。これがなかなか難しいのですけれども、三室中はやっているじゃないですか、「人に学び、物に学び、自然に学ぶ」。農作業を通じて土の感触を味わっています。あるいは、果物が新鮮を失って並んでいるのではなくて、目の前にあるサクランボの新鮮なものを手にして、なるほどな、生きているものというのはこういうことなのだということを触覚で味わうことの楽しみです。

修学旅行では五覚を大事にし、ちゃんとした目当てをもって、見るところではこれ、聞くとこころではこれと目当てさえしっかり持てばどんな修学旅行をレイアウトしても、子どもたちが満足感・成就感の大きなおみやげを持って帰ってくるのではないのでしょうか。

石森 続きまして、柴田さん、よろしく願いいたします。

柴田 私は海外修学旅行にテーマを絞らせていただいて、どんな意義があるのかということについてお話をさせていただきたいと思います。

海外に行けば珍しいものが見られ、珍しいものが食べられ、驚くようなことがたくさんあるのですけれども、今、日本人または日本の若い人に求められているのは、国際感覚のある人材の育成です。すべての人が国際感覚を持たないと、今、世界で起こっているいろいろなことについての的確な判断、または的確な外交、的確な政治ができないという状況になっているのではないかと思います。イラクの問題など大きな問題もあります。北朝鮮との問題もあります。こういったものに我々日本人がどのように対応するのか、それをどのように理解する人を育てあげるかということで、それは教育の現場でも家庭の中でも行なわれなければなりません。

情報はたくさん入ってくるけれども、それを判断する材料を持たない。日本人というのはなかなか国際化されない民族だと外国の人は見えています。世界第2の経済大国として大変不甲斐ないランキングにあるのではないかと思います。そういう意味では、若い人にできるだけ早く海外に出て、大きなテーマではなくても、外国の人がどんな考え方を持って、どんなところに住み、どのような生活をしているのかということを知ることが、これからの日本の国にとって大切なことだと思います。

もちろん、それですべて終わるわけではございませんけれども、自分たちと違う生活をしている、違う考え方をしている、そういう人たちと共存していかないといけないのだということを理解するのに、一番手っ取り早いのはまず海外に行ってくださいことだと思います。できる

ならば修学旅行で海外に行っていただきたい。その中で一番、行っていただきたいのはアジアの国々であります。

私はアジアにこだわっていますが、戦後の復興で日本が戦火の中から立ち上がり、いろいろな国々を援助して立派な国が出てまいりました。私が4年間駐在したシンガポールも、今や我々日本人をしのぐほどの生活レベルを享受しています。マレーシアも、世界第18位の貿易大国になり、2020年までには先進国入りするということです。また、タイも大変な経済成長をしている。これはすべて日本が戦後いろいろ苦しい中で援助してきて、そこにでき上がった国々であります。

これを私たちは決して自慢するわけではないですが、ぜひ若い人たちに現場を見ていただいて、何かを感じていただきたい。そういうことを提供できるのは修学旅行だと思いますので、皆様方の学校で「よし、やってみよう」ということであれば、私もいろいろご協力をさせていただきますと思っております。国際化という面で、若い人たちに一番やっていただきたいのは海外修学旅行であります。

石森 それでは、川邊先生、よろしく願いいたします。

川邊 修学旅行というのですから、学を修める旅行、つまり、中学校3年間の課程を修了する、あるいは義務教育機関の最後を飾る、そして、身を修めて、学び修めて、その機会として旅行をする。つまり、平素と違った環境に身を置くという体験を通して学を修めていくということですから、もっと敷衍していただければ、それまで義務教育あるいは3年間の過程で身につけてきた確かな学力も含めての知・徳・体。もっと言えば人間力のようなものを、総決算として振り返ったり、深めたり、築いたりしながら、堂々と卒業していく、そのための旅行というふうに考えることができるのだらうと思います。

学習指導要領の行事のねらい、いわゆる修学旅行を含めた旅行・集団宿泊的行事のねらいとして、「平素と異なる生活環境の中にあって、教師と生徒及び生徒相互の人的なふれあいや信頼関係を経験し、人間としての生き方について自覚を深めるとともに生涯の楽しい思い出をつくることのできる」と書かれています。続いて、文化・経済産業・大自然に触れること、集団行動で安全や集団の決まり・社会のルール・公衆道徳を守ること、そして、レクリエーション、健康、安全、さまざまなことを挙げて、「単なる物見遊山に終わることのないよう有意義な旅行・集団的宿泊行事を計画する」ということになっています。この前段が人間力を総括して言っているのかなと思います。

そうしますと、子どもたちの今持っている人間力、人としての基礎、基本で一体どういう点

に課題があるのかということに目を向ける必要があるだろうと思います。子どもを全体として見るときに、問題点だけを拡大していうと前途を悲観するようなことになるのですが、課題を分析するときにはそういう厳しい面もきちっと見据えるといことも大事だという意味で申し上げるわけでありませう。

残念ながら、中学生が、いたいけな子どもを殺害したりいたずらをしてみたり、数人で寄ってたかって殺害したり、いじめ尽くしてみたり、巻き上げてみたり、逆に言えば人間関係の調整力がうまく育っていないがために、人とかがかわることを忌避する、引きこもる、不登校という形であられる。人と一緒にいるのが苦痛だと、電話や携帯電話での話しはとても流暢だけれども、フェイス・トゥー・フェイスで話すことはどうも苦手だ、人の表情が気になるという子どもがいます。

あるいは、ITの時代で言えば、ゲームのようなバーチャルな世界で、絶叫してみたり、のめり込んだり、わめいたりする。例の長崎の子どもを殺した中学生はゲームセンターの支店長にしばしば「あまり大きな声を出して夢中になるな、お客さんがいるんだから」とたしなめられたということです。そういうゲームのようなつくられたバーチャルな世界にリアリティーを感じて、全身全能、五感を総動員して興奮する。片や、インターネット等で自分の通信を読んでいるのは、人格を持った、喜怒哀楽を持った人間だ、その相手に対する尊厳、尊重という視点に立って通信をする。そういうことにはリアリティーを感じないで、殺せとか、死ねとか、馬鹿だとか、ちゃんだとかいう、ゲームでバーチャルな世界で遊ぶような通信をしているという問題。

無関心や無感動、あるいは、夢や希望が持てない。課題としてみれば、大なり小なりそういうことが指摘されるわけでありませう。そういう子どもたちが学を修める、人間としての修業、人間としての学びを総決算していく旅にしよう、こういうときに一体何が必要なのだろうかということを考えませう。

修学旅行ということとちょっと離れませうが、武蔵野市ではセカンドスクールを小学校5年生、プレセカンドスクールを小学校4年生で始めませう。中学校1年生は4泊5日、小学校は9泊10日の学校、7泊8日の学校、6泊7日の学校、最低でも1校は5泊6日、農山漁村に行き、そこで宿泊しながら自然体験、農業体験を行なっております。

その中で重視しているのは、次の点です。一番目は、人間としての基本的な体験です。先ほどのような人間としての力の基礎というのは、今の子どもたち、特に都市に住んでいる子どもたちは人工的な空間の中で、暑ければ冷房、寒くなれば暖房をつけ、体温調節すら赤ちゃんのと

きから十分に育たない。そして、夜っぴいて明るく、暗闇なんていうのは知らない。つまり、暑い、寒い、雨に濡れた、お腹が空いた、汗をかいた、働いて疲れた、痛いなどの、生物体・生命体としての人間の基本的な体験が欠けているから、人の痛さやつらさがわからないところがありはしないか。そこをどう育てるか。

2番目は、自然の多様さやすばらしさ。自然に対する感受性を豊かにすることが大事だろうということです。人間というものが大いなる自然の中で生かされているという存在、生命に対する自覚、そういうものは自然の中に身を置く、自然体験をすることを通してしか得られないだろう。レイチェル・カーソンの『センス オブ ワンダー』じゃありませんが、驚きの心を持ち続けさせる、自然に対するナイーブな感覚を持たせるということを大事にしたい。

3番目には、私たちが生きていく上で欠かせない農林、漁業等の生産の重要性を体験する。みんな袋に入っている半加工品、出来合いのもの、切り身、そういうもので生活をしていて、それがつくられている過程や苦勞、生産の様子を知らない消費者がどんどん生れる。そして、一流の商品であるという偽のレッテルでも、そのレッテルを見て安ければ買う。そして、流通も顔と顔が見えないですから、生産者の苦勞を消費者に適正に伝えることがうまくできない、お互いに不信感がある。こういう時代でありますから、働くことの意義や生産というものに対する感謝の気持ち、あるいは、食というものに対する認識、こういうものを持たせる必要があるだろう。

4番目は集団の中での規律。大集団で動くということも大切だし、中ぐらいの集団、小さい集団を含めて、お互いが力を合わせ、気持ちを通じあい、連帯し、協力しあい、喜びを分かち合う、悲しみを分かち合う、そういう体験を生活の場を通してどう組み立てるかということです。そしてまた、都市の生活から失われている人間関係、自然とのふれあい、そういうものを農山漁村で農家の人と一緒に生活する中で、食事の支度を手伝い、野良に出て農家の人たちと一緒に働く、汗をかき、昼飯をみんなで作って食べる。都市部では、父親は夜遅く家に帰り、母親はパートにいて、子どもが帰っても誰もいない。そういうことで一緒に汗を流したり苦しんだり、働いたり、食卓を囲んだり、おしゃべりをしたりという濃密な体験を享受する機会が失われている。そして、人間が生きるということ、生活することはこういうことだということを体験の中で学ばせる。そこに今まで学んだ教科学習あるいは総合的な学習の時間で学んだ力を発揮して、自分の足りなさを発見し、新しい自分を発見し、生涯に残る体験として思い出としていく、そのような修学旅行という観点が大事ではないかと考えます。

石森 川邊先生から修学旅行の持つ意味についてきちんとご説明いただきました。

修学旅行というのは、学校生活における総決算的な旅行ということですが、今まで皆様方からいただいたものを要約しますと、1つは、見学という体験を通し、人間力というものをいかに高めていくことができるか、そういう際に五感の感覚を最大限に出すような形で体験をすることのできるような旅行を考える必要があるだろうということです。

特に、柴田さんと天野さんからは、現在の世界の出来事や、歴史文化などをさまざまなマスメディアを通して我々は知ることができますけれども、現実の世界はグローバル化し、グローバルイゼーションが大きく進んで、アメリカを中心にして世界がアメリカ文明で統一されている。今後はさまざまな地域、民族、国の文化が等しく認められるための統一化が進む中で、一方ではそれぞれの地域の伝統、文化の多様性を認めていこうということになっています。そういう多様性について修学旅行を通して、自らの五感を通して知ることの重要性というようなご指摘もいただきました。

今後、修学旅行というのは、今のお話でも明らかなようにさまざまな形をとっていこうということでもあります。その一方で、人間力を修学旅行を通して高めていけるような学びができるかということも結論づけられておりますので、皆様方も充分にご理解いただけたと思います。

そして、最後のステージでは、今日お見えの皆様方にも今後の修学旅行をそれぞれの立場で考えていただくときに参考になるような、具体性を持った提言をいただければと思います。

それでは、小野先生からよろしく願いいたします。

小野 今の子どもたちには感動がないとか少ないとか言われます。そのために、感動のある場を意図的に設けることが必要だろうと思うのです。では、そういう新鮮な感動というのはどういう場所で得られるかというのは皆様もそれぞれお持ちだろうと思いますが、目的地に連れて行ったり移動させるには、今までの既成の方法では無理だと思います。そこで、ダイナミックな修学旅行を考える必要がある。それには、飛行機の利用が効果的だと思います。飛行機は早朝の割引があるし移動の時間が短い、沖縄にさっと飛んで見学・行動ができる。現在の交通機関はほとんど安全性が高められていますので、多様な交通手段が考えられます。

子どもたちは回復力もあるし、時間をフルに使った活動的な修学旅行ができると思います。また、先ほど申し上げましたように、テーマを絞った修学旅行の実施です。

石森 続きまして、柴田さん、よろしく願いいたします。

柴田 私は海外の修学旅行しか知りませんので、その受け入れの中で、関係の方々とお話をしっていて感じたことを幾つか申し上げたいと思います。

日本人の国際化のために修学旅行も海外に大いに出来るような時代がもう来ております。しかし、見るだけ、食べるだけ、現地で学校間交流をするといっても形式だけという形が多く見られました。これからはその内容をもっと充実させないといけないと思います。

中には、現地の学生と同じバスに乗って1泊旅行を試みたらどうかというご意見も出てまいりました。そして、宿でお互いにつたない英語で意見を交換したり、考え方を述べあったりしたらお互いにいいことではないか、こんなタイの方のご意見もございます。いずれにしましても、国内の修学旅行が多様化していると同時に、海外の修学旅行も多様化していくべきだと思います。そのためには、もう少し旅行日数が長い方がいいなと思うのですが、工夫をしながら学生に有意義な旅行を提供していくことが必要です。

それから、環境問題に対して海外でも非常に大きな取り組みがなされております。タイでもマレーシアでもシンガポールでも、それぞれの国々において積極的な取り組みがされておりますので、日本の若い人たちが、体験を通して、環境問題を世界の人々と一緒に考えることも、いいのではないかと思います。

これからはただ単に行きます、泊まります、見ます、そういうことではなくて、そこで何をするのか、特に現地の学生たち、現地の家庭の方たちと一緒に何かを生み出せる新しい旅行の素材を提供するべきであろうと私は常々考えております。

石森 続きまして、川邊先生、よろしく願いいたします。

川邊 さて、この研究大会の主題は「みんなで創ろう 21世紀の修学旅行」ということですから、大胆な言い方をさせていただきました。しかも、先ほどご報告のありましたように、都内の中学校の平成13年度より14年度、12年度より13年度、だんだんと体験型が増えているのは事実です。しかも、農山村でやるというものが増えていることは事実であります。しかし、今までのように京都・奈良へ行ったから時代おくれということにはならないのです。日本の伝統的な文化や芸術を若いうちに見せて、これからの国際社会における日本人としての生き方を考えさせてみる必要があるのではないかとということも提起させていただきたいのです。

そういう背景で、今皆さんが修学旅行を変えるということを考えるとき、今、国を挙げての動きを情報として提供したいと思います。それは、「都市と農山漁村の共生・対流推進会議」が国民運動として始まっていることです。

こうした背景の動きに合って、学校教育において、総合的な学習の時間を活用して、農林業・漁業体験や、自然体験学習に取り組む学校は徐々に増えているほか、旅行分野においても、体験型旅行への流れが着実に進んでいます。また、一般的に、週末の市民農園、退職後の田舎暮ら

しなど、農林漁業に携わりたいと希望する人が確実に増えています。さらに、こうした都市住民のニーズを農山漁村につなげるNPOの活動も高まってきて、都市住民が農山漁村に向うという新しい動きが大きい。逆に、農業の側でも、何とか魅力ある農業環境、そして、暖かな人のいる農山漁村をつくるという姿勢が見られます。

このような動きの中で、修学旅行を考えていく必要があるのではないか、そういう観点も大事にしていく必要があるのではないかと思います。

石森 それでは、天野さん、よろしくお願いいたします。

天野 きょうのお話を聞いておりまして、現場の先生たちは相当に努力をされておられまして、既に多様化の取り組みがなされていることをうれしく思います。

これからの修学旅行の具体的なテーマがいろいろ考えられます。例えば、環境浄化の問題です。ハワイで、海岸の清掃をやっている高校生が見られます。また、訪れた都市の経済状況、町の成り立ち、文化などを調べ、自分のすんでいるところと比較するなど教材にすると興味が湧いてきます。

日本は選択肢が少ないといわれます。修学旅行の行き先も多様化することも考えられます。一週間の中で、方向や学習テーマをチョイスして判別にも実施することも考えられるでしょう。

石森 4人のパネリストの皆様方から、具体的な経験も含めて新しい修学旅行のあり方についてヒントを与えてくださいました。また、パネルディスカッションを通して、長年の経験からのご意見をいただき、さまざまな修学旅行を取りまく問題点が指摘されました。そして、新しい修学旅行の形というのが鮮明になったということで、大変興味深く思ったところであります。

三室中学では、3年間のステージを踏んで、さまざまな生き方を学ぶことが積み重ねられている。また、武蔵野市では、6年間かけて修学旅行のあり方が考えられています。これは先生方にとっては大変手間ひまのかかることでありますけれども、人としての生き方を学ぶという意味の修学旅行、体験学習が今後さまざまに展開される必要があると思います。

もう一つ、先ほど川邊先生のご指摘のように、地域間交流事業、特に都市と農山漁村の共生・対流という点から捉えてみますと、修学旅行で農山漁村に滞在して学ぶということは、新しい発見のチャンスを得るということで、学校、地域双方にとっていいことであろうと思います。修学旅行というのは単に学校の問題として考えるのではなくて、今後の日本における地域のあり方を考える上でも大変重要な役割があります。むしろ先生方だけで取り組むのではなく、地域の人々にもご協力をいただくということも重要な形になってきています。そういう意味で、体験型修学旅行という形の中で考える必要があります。

もう1つは、小野さん、天野さん、柴田さんからのご提唱でありましたけれども、外国での修学旅行の可能性も、環境学習だけではなくて、私どもの民族文化学習等々、子どもたちが自らの五感を通して異なる世界での動きを学ぶことが重要です。今、中国、韓国、シンガポール、マレーシア、モンゴル、オーストラリア、ニュージーランドなど、相当広い範囲で行なわれています。埼玉県ではインターネット授業が、海外の学校との国際交流ということで、14回以内をめどとし、15名から30名程度で新しい形の授業も動いているようでもあります。

ただ、問題はいかに安全を確保するかということですね。日本では、出かけるのを見送るときに「気をつけて」と言われますが、アメリカの経営者は「なんで日本人は危ないと考えるのだろうか」と。アメリカ人は“Have a nice trip”、すてきな旅を楽しんでくださいということです。

「特に修学旅行は安全でなければいけない。安全であるということは無難に過ごせる。無難に過ごすということは、形式化したタイプの修学旅行でよろしい」ということになりかねません。そういう点で、今後、修学旅行での危機管理といった問題が大きく作用するのでしょうか。

もう1つ、重要なのは規制緩和といった問題。大阪府は2001年度から旅行費用の制限が撤廃されております。また、地方空港の活性化の問題もあって、秋田県では修学旅行に1人1万円の補助を出すということも行なわれているようです。いずれにいたしましても、実際の現場でそれを担う先生方においてはさまざまな問題が山積している中で、それを遂行していかなければいけないということで、本当に頭の痛いことであろうかと思えます。

学校内での教育も重要であります。学校の外に出ての人間としての生き方を学ぶ場というものが、より多様性を持つことを祈念いたしまして、このパネルディスカッションを終わります。すばらしい発言をいただきましたパネリストの皆様方に盛大な拍手をいただきまして、閉じたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)